今年もにぎやかに初午まつり

憲法と“戦争のためには土地は売らない”闘いが平和公園を守った

百里弁護団　内藤 功さんの挨拶

安倍改憲を阻止しよう！

初午まつりの準備設営にあたられた地元の皆さん有難うございます。皆さんが、日頃、平和公園・平和稲荷の維持・管理・活用に払われているご努力に感謝申し上げます。また本日、県内各地からお集まりの皆さん、そして、東京など各地から駆け付けられた皆さん有難うございます。

今年の初午まつりは、憲法９条めぐる重大な情勢の中で開かれます。安倍政権は、憲法９条改憲案を国会に提示する野望を捨てていません。安倍政権が改憲の口実としていた朝鮮半島の情勢は、大きく変わりつつあります。朝鮮半島の非核化と平和体制の構築をめざす、南北・米朝の首脳会談など、平和への激動が起こつています。この情勢に確信をもって、３千万人署名運動をはじめ、安倍改憲を阻止し、安倍政権を退陣に追い込みましょう。

特攻隊の出撃基地だった百里

百里基地は、アジア大平洋戦争中、海軍の飛行基地でした。戦争拡大とともに、基地は次々と拡張されました。「１週間以内に立ち退け。天皇陛下の命令だ」と、ただ同然で取り上げられていきました。1945 年８月 15 日、戦争は終わりました。正午の終戦を告げるラジオ放送の数時間前にも、百里飛行場から、特別攻撃隊の、10 代 20 代の若者たちが、飛び立ち、撃墜されて尊い生命を奪われました。

「戦争のためには土地は売らない」農民たちの闘い

戦後、憲法９条の下、もう戦争はないということで、農民の方々のたいへんな苦労で、飛行場は農地に変えられていきました。ところが、１９５６年、突如、航空自衛隊の戦闘機基地にするため、防衛庁が買収にかかってきました。多くの方々が立退いていきましたが、「戦争のためには土地は売らない」という決意の方々は、反対同盟に団結して土地を守り営農を続けてきました。この平和公園は憲法９条と、闘いによって守られてきた大事な土地です。ここに、平和とくらしの神さま、お稲荷さんをお祀りしているのです。

百里裁判が「く」の字の誘導路を生んだ

百里裁判は、管制塔前の土地をめぐり、防衛庁が、訴訟を起こして始まりました。弁護団は、戦闘機基地のための土地買収は、憲法９条に違反するとして、正面から闘いました。東京の砂川事件、札幌の恵庭事件、長沼裁判の闘いと、励ましあいながら 31 年の間、闘いました。裁判所の判決は、不当な判決でした。しかし、頑強なこの抵抗におそれをなし、誘導路（第２滑走路）は、この平和公園の土地を迂回して「く」の字（「へ」の字）に曲がっております。世界で類のないことです。

憲法を「武器」に闘ってきた百里「安倍改憲許すな」の決意を！

戦後 73 年余、日本の自衛隊員は、ひとりも戦闘による戦死者を出す事無く、また、戦闘でひとりの外国人もあやめたことがなかったのです。これは憲法９条が厳然とあるからです。そのことは、多くの自衛隊員と家族も認めているところです。百里闘争で一貫して憲法を「武器」に闘った成果であります。今日ここに集まった私たちは、「安倍改憲許すな」の決意をあらためて固め、一層前進しましょう。

百里の会

第２号　2019年3月15日

一般社団法人
百里の会
〒茨城県水戸市見川 5-127-281
Tel/Fax 029-251-2806
E-mail hyakurip@gmail.com
HP https://hyakurip.web.fc2.com

初午まつりの歴史を紹介します

156 ～ 182 ページより抜粋した。この部分の全文は「百里の会」のＨＰに掲載。

百里原物語（松原日出夫著　1998年）

百里のお稲荷さん

百里基地の誘導路を「く」の字形に曲げさせている平和公園に、お稲荷さんが祀ってある(というよりも、お稲荷さんを祀ってある土地が平和公園になったのであるが)。

このお稲荷さん(百里稲荷神社)は、基地反対運動のなかで祀った神様である。もう四十年近い歴史をもち、毎年おこなわれている初午祭は、百里基地反対運動の年中行事になっている。

最初の頃の初午祭は、旧暦二月の最初の午の日であったが、途中から変更して２月１１日に催すようになっている。

初午祭は、百里の運動のひろがりと、新暦の休日に変更したことによって、年々参加者が増えて、いまでは、４、５百人もの人が集まるようになっている。催しものの内容も、お稲荷さんのお祭りというよりも、どちらかというと、平和運動の「新春の集い」といったような色彩がこくなってきている。

四十年という歴史は、神社としてはきわめて短いものであるが、しかし、このお稲荷さんを、百里原に祀ったときから、かかわつてきている人は、いまでは、地元の小川町でも数少なくなってしまっている。まして地元以外の人たちは、そのほとんどの人が、百里のお稲荷さんの歴史を知らずに「初午まつり」にきているのではないだろうか。

百里のお稲荷さんは、基地反対闘争とともに、波瀾に満ちた道を歩んできたのである。

講演とやくざ芝居で「遷宮祭」

百里原の１９５８年２月といぅと……。基地反対の山西きよ町長が誕生して１年。百里原の現地での、仮設道路上の座り込み闘争からは半年たっている。そして、１カ月後の４月には防衛庁百里事務所の投石破壊事件が起こり、さらに建設資材の搬入の強行へと、激動の時期に入っていくのである。

この時期、基地建設予定地の北側部分では、防衛庁や西松建設(百里基地建設工事を受注した土建会社)などの動きで、緊張の度が増していたが、基地建設予定地の南側部分は、主として滑走路建設の予定地なので、工事の動きもなく静かであった。

その、南側部分のまん中に、２００人をこえる人たちが集まっていた。近くには舞台が設けられ、露天の店も数店でているという賑わいであった。

このあたりは、防衛庁が買収した荒れ地となっている土地と、反対同盟員が所有している小松の林がひろがっているだけで、、ふだんは人影もほとんどみられないところである。この辺鄙なところに、なぜ２００人もの人たちが…

愛町同志会と基地反対同盟の人たちで、なかにまじって支援団体の人たちの姿もあった。これから百里稲荷の「遷宮祭」がおこなわれるので集まっているのである。

やがて、人びとが待つ中へ、愛町同志会の幹部たちが、小さな社を神輿(みこし)のように担いでねり込んできた。社の中には、笠間稲荷から受けてきた御神体が収められている。社が前もって予定されていた場所に安置されると、厳かに遷宮祭の儀式がとりおこなわれた。

こうして、　１９５８年２月２０日。百里のお稲荷さんが、反対同盟の川井信さんの土地に鎮座したのである。

愛町同志会の幹部たちが集まっている席上で「基地予定地内にお稲荷さんを祀ろう」という相談がもちあがったのは、半年ぐらい前のことだった。山西町長から提案されたのである。

集まっていた人たちは、「お稲荷さんは、商売と農業の神様だから平和の神様だ」と、即座に賛同した。なかには「科学の先端をいく飛行機のパイロットも、意外に縁起をかつぐということだから、お稲荷さんをつぶすのを、防衛庁や自衛隊はいやがるにちげえねえぞ」そんな言葉も飛びだしたりしたのだが。

しかし、山西きよさんや愛町同志会の幹部たちは、神罰や祟り(たたり)をお稲荷さんに期待していたのではない。基地反対運動の守り神としての、心のよりどころを求めて、お稲荷さんを祀る気になったのである。しかし、それだけではなかった。お稲荷さんを祀る準備をすすめるなかで、もうひとつの思いがふくらんでいたのだった。

それは、稲荷神社を、同志たちが集まってくる場

にしたい。お稲荷さんが、その「よりどころ」になってくれるのではないか、という期待であった。

遷宮祭のあと、近くに設けられていた舞台の上で、奉納の催しものがおこなわれたが、「みんなが集まる場にしていきたい」という思いは、すでにこの催しもののなかにも込められていたのである。

奉納の催しものは、奇妙なとりあわせであった。その目玉が、平和団体の幹部の講演と、与沢地区の青年たちの素人演芸―腰に長どすカッパからげて三度笠―のやくざ芝居だったのである。

このうちの、講演の方は、「話をきいて基地反対運動に確信をもとうという企画だな」と、すぐに納得がいくのだが、しかし、素人演芸のやくざ芝居の方は、たんなる余興としか思えない。しかし、この、青年たちの素人演芸にも、山西きよさんら愛町同志会の幹部たちの期待するものがあったのだ。

もちろん、集まってきた人たちに楽しんでもらおう、ということであったが、同時に、「基地反対運動にともに立ち上がっている元気のいいわか者たちの姿を見たら、きっと、みんなの意気も上がるだろう」という期待だったのである。

そのとおりだった。集まっている人たちは、わか者たちの芝居にヤンヤの手ばたきを送っていたが、それには、若い、頼もしい同志たちへの連帯の思いが込められていたのである。

さて、これだけの話だと、お稲荷さんは、なにごともなく順調にこの地に鎮座したように思われるだろうが、じつは、ここまで漕ぎつけるためにはたいへんな苦労があったのだ。すべりだしは、けして順風満帆ではなかったのだ。

「さわらぬ神に…」で困ってしまったお稲荷さん

百里のお稲荷さんが鎮座する場所が決まるまでが大変だったのだ。最初に予定していたところは地鎮祭までやったのだが、その土地が農地であったために、農地法の規制をうけて「神社を建てることはまかりならん」ということになってしまったのだ。

遷宮の日は迫ってくる。山西町長らは、お稲荷さんを受け入れてくれる土地を求めて、信戸委員長をはじめ反対同盟の主だった人たちのところを、つぎつぎと日参したのだが、どこへいってもいい返事はもらえなかった。

「基地予定地のなかにお稲荷さんを祀る」という総論ではみんな賛成した人たちなのだが、では「あなたの土地に」となるとだれもが“触らぬ神に祟りなし”を決めこんでしまうのだった。

お稲荷さんは、「人間というのは、まったく身勝手なものだな――自分が困っているときや、願いごとがあるときは“苦しいときの神頼み”をするくせに、自分にとって都合が悪いことになると“触らぬ神に祟りなし”で、そっぽを向いてしまう「これじゃあ神さまもやりきれない」と、たぶん、なげいたり、ヤキモキしたりしていたにちがいないが、お稲荷さんとてどうしようもなかった。

暗礁にのりあげたまま、ついに、遷宮祭の前日がきてしまった。愛町同志会の幹部たちは、遷宮祭の延期も考えぎるをえない、と半ばあきらめかけたとき、「救いの神」ならぬ「救いの人」が現れたのだ。―お稲荷さんを祀る場所がなくて、山西町長らが頭を抱えている―のを知った川井さん親子(信さんと弘喜さん)が相談して「私の土地でよかったら」と申し出てくれたのだった。

こうして、ギリギリのところまで追つめられながらも、このときは無事遷宮祭をいとなむことができたのだったが…

数年後に、またまた、お稲荷さんに、ご難が降りかかったのである。稲荷神社のある川井さんの土地もふくむ、その周辺一帯の土地は、基橘農協の共有地だったのである。区割りをして、個々の組合員に配分されていたので、だれも、そこが自分の土地になると思って管理してきたのである。ところが、組合内部で「配分のし直し」問題がでてきたのだ。川井さんは、「自分のところには、稲荷神社があるから」と、再配分に反対したのだが、その意見は入れられず、稲荷神社のある区画は、Tさんの配分になってしまったのである。Tさんも、もちろん反対同盟員だったから、稲荷神社も移転せずにそのままにして、T さんの管理にまかせておいたのだが、しばらくたって、とんでもないことが起こってしまったのである。

Tさんの土地から、いつの間にか稲荷神社が姿を消してしまったのだ。驚いて、山西まよさんと川井さんが、T さんを問いただしたところ、「御神体は笠間稲荷に返し、社は壊して燃してしまった」というのだった。

この頃になると、防衛庁の、反対同盟員にたいする個別切り崩し工作が功を奏しはじめて、反対同盟員のなかに不安と動揺がしだいに濃くなってきていた。T さんも―いつまでも反対運動に足をつっこんではいられないぞ。そろそろ身の振り方を考えなければ――と、気持ちが変わってしまったのである。そうなると、稲荷神社が困った存在になってきた。お稲荷さん付きで、防衛庁に土地を売るわけにはいかないからだ。そこで、そうなる前に笠間に返して

しまったのだった。

お稲荷さんは、再び百里原に戻ってきて、こんどは、最初に鎮座したところから北西約１５０メートルのところに遷宮をした。そこは、ちゃんと川井さんに所有権のある安住の地であった。

百里稲荷神社は、平和公園として整備するにあたって、同じ川井さんの土地の中で、もう一度、新築移転をしている。それがいまの社である。

2月11日になるまでには…

「初午まつり」を２月１１日に変更するに当たっては、つぎのような経緯(いきさつ)と論議があった。百里原の現地調査がくり返しおこなわれたり、「一坪運動」の地主がふえていくなかで、「初午まつり」の人気も上がり、毎年参加する常連の人たちのなかから、「友人たちをさそうのだが、平日なので参加が難しい人が多い。なんとか、日曜日に変更もらえないだろうか」という要望がだされた。

そこで、反対同盟で相談をしたのだが、「旧の初午の日以外にやっているお稲荷さんはどこにもないだろう」「別の日では、祭ではなくなってしまうのでは…」「反対同盟とは関係なく、初午の朝お参りに来て、御供物を供えていく人たちがけっこういるんだ。反対同盟だけで勝手に変更していいものだろうか」などの意見が出て、そのときには結論に至らなかった。

しかし、そのご、こんどは百里基地懇談会の会議の席で、「運動を広げるために、日曜日に変更できないか」という要望がだされた。

そこで、反対同盟では再度相談をして、変更する決断をした。変えるのならば日曜日よりも、毎年、月日が固定している休日の方がよいだろうと、２月１１日にしたのである。もちろん、山西きよさんらの了解をえての上なのだが。しかし、この変更は、神さまが口をきけないのをよいことにして、かんじんの、お稲荷さんの意見をきかず、許可も受けずに決めてしまったのである。だから、このときにも、「人間どもの身勝手さが、またまかり通った」と、お稲荷さんは思ったかもしれない。

「初午まつり」が休日になると、東京からは貸し切リバスで参加するようになり、百里の年中行事として定着してきた。そして、新しい人たちのなかに百里の運動をひろげていく場ともなってきている。ここ数年来は、毎回４、５００人もの人が集うという盛況になっている。ただ、ちょっと気になることがある。

「盛大になるのは大いに結構なことなのだが、それにつれて、地元の人たちが、ますます裏方になってしまっている。これでいいのだろうか」という声が、私の耳にも、ときどき入ってきていることである。

お稲荷さんも、そう思っているのではないかな―、と、思ったりもするのだが…

かみだのみ

百里のお稲荷さんが鎮座してから３９年になる。お稲荷さんは、毎日、毎日、騒音ををあびせられていても「うるさい」とはいわない。頭を下げずに前を素通りする人がいても、文句ひとつ言ったことがない。

３９年間もの間、なにをしてきたのだろうか、なにもしてこなかったのだ。神様だからなにもいわず、なにもしないで、だまって基地の真ん中に鎮座しつづけてきたのである。

だが、振り返ってみると、ばあちゃん、かあちゃんたちは、ここで楽しい１日をすごして、明日からのがんばる力をたくわえた。百里のたたかいが苦しいときに「初午まつり」に集まって来た支援の人たちは、反対同盟を励まし、さらに支援の環をひろげるためにふんとうしてくれた。

いまでは、「初午まつり」に数百人もの人たちが集うようになり、ここでしか会えない仲間たちとも、お神酒を酌み交わしながら喜怒哀楽を語り合えるようになった。そしてなによりも嬉しいことは、毎年、毎年、新しい参加者が増えていることである。「初午まつり」が、百里原のたたかいと平和を守る運動の、ひろがりをつくっていく場になっていることである。

かつて、山西きよさんら、愛町同志会の幹部たちが、百里原にお稲荷さんを祀ったときに、――基地に反対する仲間たちの集まる場がほしい。お稲荷さんを祀って「そのよりどころにしたい」という願いは――。

そのときどきのお祭りの行事や、集まって来る人たちの顔ぶれは変わりながらも、着実に実を結んできているのではないだろうか……。

私は、このことに、かっての愛町同志会のはしくれの一人として感謝したいと思うのであり。そして、これからも百里のお稲荷さんに、仲間たちが集まる、その「よりどころ」になりつづけてほしいと願っている。これが、私の“かみだのみ”なのである。

＊『百里原物語』からの引用は以上です。（終）